研究会『地方消滅』感想・質問　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　s14778mm 松本倫明

感想

去年、消滅可能性自治体が発表され、衝撃を受けた。数の多さだけでなく、自分の出身地である大阪にも消滅可能性自治体が存在する―大阪のような大都市に消滅可能性自治体があることは特に意外だった―ことに驚き、その自治体リストをテーマに「国土政策」の授業の最終レポートを徹夜で仕上げたのを今でも覚えている。

この本はその衝撃的な事実の根拠となるデータとその対策を非常に解り易く説明している。しかしここで問題となるのは、なぜその政策が実施されていないのか、ということであろう。地方中核都市に人口流出防止の役割を担わせるという案は国も取り組みつつあるようだが、その他の具体的な政策がなぜ実行されないのか。ここを分析するべきだろう。

人口流出の原因

地方から人口が流れ出る理由も本書では多く取り上げられていた。自分も大阪から関東へ流出したものとして思うところがある。特に私が問題だと思ったことは、大学教育機関が大都市、それも東京周辺に集中していることである。

私が慶應義塾大学に入学した一因は、トップクラスの私立大学が集中しているからである。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 国立のトップ | 東京大学 | 私立のトップ | 慶應義塾大学 |
| 文系のトップ | 一橋大学 | 理系のトップ | 東京工業大学 |

以上のようにトップクラスの大学と思われている大学は殆どが東京に立地している。関西にある大阪大学より東京大学のほうが、ネームバリューがあるだろう。関西人の感覚からすると、早稲田に行くくらいなら同志社大学に行くのがいいだろう、という人もいるだろうが、同志社大学よりも慶應義塾大学だろう。

学生にしてみれば、上を目指そうとすれば東京に流出せざるをえない、という現状がある。その点、秋田の国際教養大学は、地方にとって素晴らしい魅力であろう。

地方独自の価値は

国際教養大学のように地方で独特な価値を持つ魅力が人口流出を抑制する手だてになることは間違いない。『地方消滅』の中で討論を行っている藻谷氏は著書『里山資本主義』の中で岡山県やオーストリアでの森林利用について非常に詳しく解り易く解説している。「目の前にあるものを燃料として発電ができている」仕組みを岡山県は取り入れ、若者に都会では手に入れられない独自の職やライフスタイルを提供しているという。里山資本主義はまさにこれから地方が進む道であろう。

大阪の進む道

最後に自分の出身地である大阪がどのような道を進むのか考えたい。私は大阪から神奈川に一旦流出したことで次のことを身にしみて実感した。大阪はなんて素晴らしいところだったんだろう、と。交通が便利で、ショッピングできるところもすぐ近くにあって、食べ物もおいしい。今の自分にとって最も問題であることの一つは関東の味が舌になじまないということだ。

これらのことがあって、私は卒業後大阪で職に就きたいと思っている。しかしやはり自分にとって魅力のある職は関東にある。職や教育を地方において充実させなければ、人口流出は結局抑えられないだろう。

加えてWTCビルの問題を始め、数多くの二重行政問題を大阪は抱えている。あいりん地区も怖い所というイメージが付きまとう場所である。生活保護も大きな問題だ。つまり問題がありすぎる。

中世以来の商人の町、上方文化、お笑い文化のような独特な価値をもった大阪の復権に携わっていきたいと、切に思う。

参考文献

増田寛也『地方消滅—東京一極集中が招く人口急減』　2014　中公新書

藻谷浩介、NHK広島取材班『里山資本主義—日本経済は「安心の原理」で動く』　2013 角川書店

砂原庸介『大阪—大都市は国家を超えるか』　2012　中公新書